

# 障害児の採血に局所麻酔剤を使用した痛み緩和への取り組み

Key word : 採血・障害児・ペンレステープ・FLACC スケール

○市川雅子・西尾恵美・北村征治

大阪発達総合療育センター

## I. はじめに

近年、採血などの痛みを伴う医療行為は、子どもにとって大変苦痛が大きく恐怖や不安をもたらすと広く認識されるようになった。しかし、障害児の痛みに関するとらえ方は様々であり、より苦痛の少ない処置方法については確立されてはいない。採血時の痛みを、局所麻酔薬剤（以下ペンレステープ）を使用することで緩和し、『痛くない採血』を実践することによって、採血前における子どもの行動反応に変化が生じていたことが明らかとなったため報告する。

## II. 研究方法

1. 期間：2011年1月～3月

2. 場所：肢体不自由児入所施設

3. 研究対象：3～6歳の身体及び知的な発達に遅れのある障害児の中で、手術を目的に入園した子ども5名、手術以外を目的にした子ども20名の計25名。なお、ペンレステープの使用は、手術を目的に入園した子どものみを対象とした。

4. 方法：

1) ペンレステープを使用した5名(P群)には、事前にペンレステープの目的について、プレパレーションを行った。ペンレステープを使用しなかった残りの20名(C群)については、通常の採血前のプレパレーションのみとした。ペンレス使用の際は、主治医が診察を行い、対象児の健康を確認の上、許可を得て実施した。

2) 評価の時期を、採血前(処置室入室から穿針前)、採血中(穿針から穿針終了)、採血後(穿針終了後から退室)に分けて、P群とC群の子どもの反応をFLACCスケールを用いて行動評価し、スコアの比較を行った。評価者は、採血実施者と異なる看護師2名とした。

FLACCスケールとは、痛みの客観的評価スケールの一つである。Face(表情)・Leg(下肢)・Activity(活動)・Cry(啼泣)・Consolability(癒し)の5つのカテゴリーを用いて評価する。項目一つを0・1・2点で評価し、総合点は10点となる。生後3カ月から3歳までの幼児・特別な支援を要する子どもへの使用が適していると言われている。

3) 分析方法

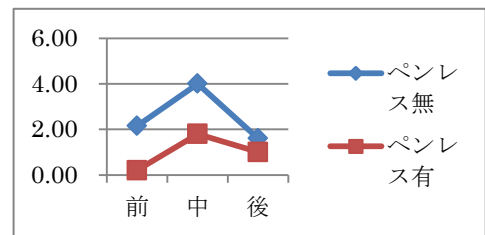
分析方法は、FLACCスケールの得点を従属変数としたペンレステープの有無(2)×評価時期(3)の2要因の分散分析を行った。下位検定にはRyan's法を用いた。

## III. 倫理的配慮

ペンレス使用対象者には、ペンレス使用の同意を得た。また、本研究への参加については、全対象者に目的・方法を説明し、不利益が生じないこと、個人が限定されないこと、自由意思であることを説明した。なお、直接対象者に同意を得ることが難しいため、代諾として母親から同意を得た。本研究は所属施設の倫理委員会の承認を得ている。

## IV. 結果

ペンレステープの有無によるFLACCスコアを比較した結果、C群の平均値は2.58、P群は1.00であった。評価時期別に比較すると(表1)、採血前のC群の平均値は2.15、P群は0.20、採血中はC群が4.00に対し、P群は1.80、採血後はC群が1.60、P群が1.00となった。採血前と採血中のスコアにおいてペンレステープ使用の有無により、開きが大きいことが明らかとなった。結果より、ペンレステープが子どもの痛みの緩和に役立っていると言える。



(表1)

## V. 考察

障害児は感情を表現する方法が微細なため、痛みによる反応が痛みによるものか、通常の反応なのかを判断しにくい。ペンレステープの効果を、FLACCスケールによって評価し比較することで、子どもが見せる痛みの反応に、心理的な要因が影響していることがわかった。採血前に、「痛くない」という確かな一言を添えることの意味は、分析結果からも明らかであり、採血という一時的な痛みであっても、その苦痛を取り去ることは必要であると考えられる。

## VI. 結論

身体的な痛みを与えないことは、子どもに安心感と医療者への信頼感を生み出す。採血の痛みを、採血者の技術的な個人差に任せるのではなく、より確実な方法として薬剤を使用することは、子どもや家族だけでなく、採血を行う医療者側にとっても苦痛が少ない。

【参考資料】 The Royal Hospital for Sick Children Edinburgh/ Acute Pain Assessment for Children